

1 あんのう せいいち 安納 成一 (栃木県宇都宮市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号	3.8ha	901kg/10a	349kg/10a (552kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族2人(本人、息子)
- 水稻専業、経営面積約9.7ha

【作付品目】

- 主食用米:コシヒカリ 1.7ha
- とちぎの星 3.8ha
- 飼料用米:北陸193号 3.8ha

【取組のきっかけ】

- 飼料用米は、需給調整の取組として地域で推進しており、農地集約による規模の拡大と収入の安定化が図られるため、取り組んだ。
- 品種については、倒伏耐性が強く多収であること、交付金を最大限生かせる多収性専用品種である「北陸193号」を採用し4年連続で作付けしている。

【取組概要】

- 種子の休眠が深く苗立ちが悪いため、播種前(2月上旬)に加温機により目覚ましを実施(約50℃で6日間)。
- 育苗は、1箱当たり播種量を慣行150gから300gとする密苗栽培で、10a当たりの苗箱使用数を15箱から8箱に減少。また、植付密度を地域の慣行60株/坪から50株/坪、一部を試験的に42株/坪で田植えを実施。これらの結果、育苗、田植え作業の約3割の労働力削減が図られた。
- 元肥として、石灰窒素20kg/10aを施用、田植え時に高度一発55を40kg/10a(窒素成分10kg/10a)を側条施肥し、出穂前(7/20~7/25)にNK202を10kg/10a(窒素成分2kg/10a)を追肥。また、田植え時に、施肥と合わせて殺虫・殺菌剤(箱処理剤(箱大臣))を同時に側条施用。
- 農研機構等の情報を参考に、初期生育期間を長く確保するため田植え時期を前年までの5月下旬より2週間早めの5月上旬までに行った。
- 圃場の一部で水位センサーを導入し、見回りによる水位確認の労働力低減が図られた。

